

開催地名	東京都稲城市
開催日時	令和6年2月3日(土) 10:00～11:30
開催場所	稲城消防署3階講堂
語り部	山縣 嘉恵 (宮城県東松島市)
参加者	稲城市消防本部、自主防災組織 41名
開催経緯	本市の自主防災組織は49組織結成されており、避難所の設営・運営に関する訓練については定期的に実施しているところだ。しかし、1年から2年の役員交代となる組織が大半であることから、継続して避難所設営・運営訓練を実施し、市民や自主防災組織が自分たちのまちは自分たちで守る共助の取組や意識の向上を図る必要がある。
内容	<p>① あの日のこと ～津波からの避難～</p> <p>地震発生当時、私は居間に、義母は自宅の離れに、息子は小学校、夫は勤務先にいた。幸いにも2003年の宮城県北部連続地震の発生以降、防災への意識が高まり家具を全てL字金具で固定するなど対策はしていたので直ぐに家族の安全確保に向けて行動する事が出来た。</p> <p>義母と息子を迎えに行き、避難所と思い込んでいた地区センターへ到着し、息子と再会出来た。その後、小学校に息子と義母と私の3人で避難した。</p> <p>地区センターは平屋建ての建物で津波からの避難場所には向いていない事があとで判明した。</p> <p>一連の流れにおいて下記7点を事前に家族で確認しておく事が重要である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家の中の地震対策が必要 ・待たせない 待たない 戻らない事が重要 ・避難場所は災害により使えないところもある ・地域の人々との日頃からの挨拶が必要 ・車での避難も想定した訓練が必要 ・避難場所は幾通りも知っておく必要がある ・学校と地域の連携した訓練、マニュアルの確認や共有 <p>野蒜の亀岡地区でもここには津波が来ないだろう、津波が来るのはもっと時間が経ってからだろう、避難場所は地区センターだろうという思い込みのみで行動していた人も多かった。</p> <p>避難時に遭遇した地域住人との会話や連携で何とか助かる事ができた。</p> <p>②逃げた後の避難生活のこと</p>

津波想定避難訓練をした事が無く、避難先の小学校も校舎1階は水没。余震も続き、ライフラインはストップ。避難した住人同士助け合う精神が求められた。

そんな避難所生活(運営)で女性の視点が特にいかされた。

- ・安否確認 地域の女性は情報通であること
- ・あるもので応急対応 少ない食材での炊き出し等
- ・不安の共有 女性に聴いてほしい心配事もある

避難所の案内においても様々なことを想定しておく必要がある。その為には平日頃から地域住民同士の顔合わせや連携が必要である。

この震災を経験しての思いは、何も知らなかったなという「反省」、自分たちは助かったが、できればみんなで助かりたかったという「後悔」、そして平時に備えられることが多いという「気付き」である。

今を生きる私たちが未来のためにできることは、伝承していくことであり、伝承から学び、行動を起こすことである。

命を大切にすることは、防災に取り組むことであり、人を大切にすることであり、人づくり・街づくりをすることである。従って、防災は街づくりであるとも言えると思う。



開催地より

実際に被災し避難所運営の経験がある方の講演を通じて、防災は常に危険意識を持つことが重要である改めて感じた。また、今後も更なる防災意識の向上に努めていく。